

キーワード…西郷文芸学、文芸教育研究協議会、内の目、外の目、異化、同化、共同体験、視点、文芸、「読み」の授業研究会、小説の構造表、語り、背日性の文学、記号論

## 粗筋

荒廃した平安京、「羅生門」の下で「餓死をするか盗人になるか」悩んでいた無職の「下人」が、「羅生門」の楼で、死骸の「髪を抜」き「鬘に」しようとする「老婆」と遭遇し、「老婆」のことに背中をおされて強盗になる。

## テーマ

未成熟な人間が破滅するまでのどうしようもない過程のはじまり。

## 解釈 語り手の性質と「作者」との関係

「作者」は存在しない。作中に登場していない。「作者」≡語り手」でもなければ、「作者」≠語り手でもない。語り手が勝手に「さつき作者はへ略」と書いた。」と語ったにすぎない。

また、語り手は①下人が認識した内容 ②下人から見えているはずの様子 ③下人には見えていない様子や状況の3つを語る。老婆が認識した内容は語らない。下人だけに寄り添った三人称限定視点といえる。また、この語り手のへ視点へはへイストワールへの外側（空間・時間共に）に存在し、下人と下人を取りまく状況を、へ外の目へとの内目の目をいったりきたりしながら語る。だからこそ、読者はへ同化へとへ異化へとを短い間隔で繰り返し、未熟な「下人」をへ共同体験へできるのである。

## 語句注釈

へ視点へ「だれの目から、どちら側から描いてあるのかということ」

へイストワールへ「物語内容」

へナラシオンへ「語り」

へ外の目へ「対象（人物やものごと）を外側から見

て、傍観者の語るに語っている場合、へ外の目へで語るといいます。」

へ内の目へ「話者が、ある人物（視点人物）の目と

心になって、その人物にかさなったり、

験へと言います。」

寄り添ったりして語っている場合、へ内の目へで語るといいます。」

へ同化へ「視点人物になりきる《同化体験》」

へ異化へ「人物たちを外側からながめる、いわば第

三者的に目撃者としてみる《異化体験》  
（《目撃者体験》ともいいます）」

へ共同体験へ「文芸の体験は、これら同化と異化がな  
いままになつた体験です。これを《共同体験》と言います。」

※参考文献は「『羅生門』における「作者」概念の考察」末に付してあります。また、そのほかに、語句注釈の出典は「文芸教育研究協議会」ホームページからの引用と、へイストワールへナラシオンについては、三省堂『大学生のための文学トレーニング 近代編』からの引用です。